

芦屋市社会福祉協議会

平成7年度、芦屋市社会福祉協議会では、市内のボランティア・社協の福祉推進委員を始め、兵庫県内や他府県の市町社協、ボランティア団体の協力で被災者支援・復興関連の事業を行った。

事業の推進には、社協内に復興委員会を設け、市内の各団体や組織に依頼するとともに、新たにボランティアの参加呼び掛けを行い、組織化を図り活動を展開した。また、他市町よりの申し出により、共催して事業を行った。

◎大和路の旅

奈良市社会福祉協議会、奈良市ボランティア連絡会の協力で、芦屋市内の仮設住宅入居高齢者をお誘いし、心身のフレッシュ事業として実施した。

- ・平成7年9月18日（月）～19日（火）
- ・参加者90人（高齢者85人、社協役員・職員5人）

※ 観光バス2台で芦屋市より奈良市へ

奈良市老人福祉センター「老春の家」で入浴、食事、レクリエーション、宿泊は奈良市営「青年の家」。翌日は奈良の市内観光を実施した。

老人福祉センターは休館日にもかかわらず、この日のために開けていただき、また宿泊の「青年の家」も貸し切りにと、どちらもゆったりとくつろげるよう配慮していただいた。ボランティアの方も手作りのお菓子や宿舎には各部屋に同泊と心のこもったお世話をしていただいた。仮設住宅での生活においては、手足を伸ばしての入浴や食事をなかなかできないので、参加者は皆ころおきなく過ごすことができた。

◎但馬からの雪の贈り物

普段雪を見ることの少ない芦屋市民のため、北但地区社会福祉連合会と豊岡児童相談所の協力で、但馬の雪が芦屋に届けられた。

- ・平成8年2月18日（日）
- ・場所 中央公園仮設住宅（芦屋市若葉町）

当日、香住、城崎、竹野、日高各町の社協と豊岡児童相談所からトラック5台で10トンの雪のプレゼントがあり、仮設住宅を始め近くの住宅から大勢の子供たちが初めて雪遊びを楽しんだ。ソリで遊んだり、かまくらを作ったりして楽しんだ子供たちの感想文を紹介する。

●（小1 男子）●

日ように、トラックにゆきがいっぱいにつんできたけど日ようさんかんで、とちゅうできたから、トラックにいっぱいのゆきが見られなかったから、またきてほしいです。

●（小3 女子）●

トラックいっぱいのおしろいゆきが、ちゅうおうこうえんに来て、私は、びっくりした。こんな雪ははじめてだった。

あしやにあまり雪がふってくれないので、いそいでトラックいっぱいのおしろいゆきで遊びました。

友だちとソリをしたり、いもうとと雪がっせんをしたりしました。ふざけて、こけて、いたい思いをしても、ゆきで遊ぶのが楽しいからぜんぜんいたくなかった。

おきにいりの服をきていてだんだんたいようが上がりてきて、雪がとけてきて、服がびちょびちょになって、それでも、遊びつづけて、雪だるまをつくって家に運んで、家の前において、おかあさんにみせました。

わたしは、おかあさんにこう言いました。

「れいとうこにいれてもいい？」

ときくと、

「れいとうこに雪なんかはいらない。」

と言われてがっかりしました。外において、家の中に入りました。

（作文は原文のまま）



事業概要表

	事業名	事業概要	8年度への課題・展望
交流 促進 事業	大和路の旅	仮設高齢者のリフレッシュ事業、奈良市社協・ボランティア連絡会の協力。 参加者90人（平成7年9月18日～19日）	
	ふれあい劇場	映画館、お楽しみ教室、カラオケ、落語、子供から老人まで	
	但馬からの雪の贈りもの	130人（平成7年11月12日） 北但社会福祉連合会より仮設の子供への雪の贈りもの	
	仮設高齢者バスツアー	50人の子供（平成8年2月18日） 龍谷大学生の招待で仮設の高齢者を京都へ 40人（平成7年10月30日）	
生活 支援 事業	仮設入居者心配ごと相談	55件 7地区229人の福祉推進委員により539世帯の高齢者を訪問	
	仮設入居者友愛訪問		
V コー デー ネー ト	友愛訪問	406世帯延べ1,800回	
	郵便受けの付け替え	470軒	
	引っ越しの手伝い	10軒	
	ふれあいセンター事業協力	運営委員会参加 催し講座の開催4ヶ所	
専門 機関 連携 事業	訪問ニーズを専門機関へつなぐ	高齢者住宅改良申請 保健婦への訪問依頼	

ふれあいセンター状況

(1996. 4. 1現在)

地区名	仮設数	開所月日	開設日数(週)	開設時間	運営委員の構成	主な事業内容	社協の関わり
呉川	81	H. 7. 8. 18	6日	9:00～17:00	地域組織...3 ボランティア...2 福祉推進委員...2 社協理事...1	気功教室 健康相談 詩吟教室 卓球教室 喫茶コーナー	運営委員会参加

高浜北	224	H. 7. 7. 18	3日	10:00~16:00	地域組織...3 ボランティア...1 福祉推進委員...2 社協理事...1	刺し子教室 フレンドじいさんた いむ 手編み、習字 洋裁教室 健康相談、お茶会	運営委員会参 加
高浜南	654	H. 7. 7. 17	6日	9:00~17:00	地域組織...3 ボランティア...2 福祉推進委員...2 社協理事...1	健康体操 編物教室 カラオケの会 編み物、手作り ちぎりえ教室	運営委員会参 加
中央公園	362	H. 7. 7. 18	3日	9:00~17:00	地域組織...3 ボランティア...2 福祉推進委員...2 社協理事...1	遊ぼう会 虹のへや 筆を楽しむ 朗詠の会 詩吟の会	運営委員会参 加

ふれあいセンター全体にかかわる成果と課題

【成 果】	【課 題】

伊丹市社会福祉協議会

ふれあい訪問活動 ここにあり記

午後1時過ぎ、仮設のあちこちでボランティアの明るい声かけと、それに応じるお年寄りの声が聞こえ出す……。

市内の仮設で概ね2日に1回、対象として60歳以上の独居老人及び60歳以下でも保健婦より見守りの必要な方をリストアップしてもらい、安否確認と孤独感解消を目的に行っている「ふれあい訪問」。

震災により仮設住宅での生活を余儀なくされた高齢者等にどのような支援が出来るのかを考えた時、まずは身近なところから...と始めた活動である。

伊丹市では、ふれあいセンター事業の一環として、3ヶ所の仮設では、ふれあい訪問、後の2ヶ所では、ボランティアの自宅からふれあい電話訪問を行っている。

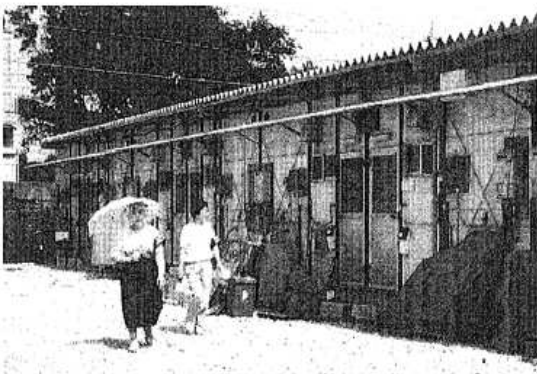
このささやかで、さりげない活動は、大事件でスタートを切ることとなったのである。

【不安・孤独】

6月17日、奥畑（280戸）に阪神間で第1号のふれあいセンターが設置され、7月1日よりふれあい訪問が開始された。皮肉にもその4日後、同仮設で孤独死というショッキングな出来事が起こったのである。

「さあこれから」という時、この事件は、私達をはじめボランティアに大きな波紋をなげかけることとなった。

亡くなった方が60歳以下の単身者ということもあり、「60歳以下の方も訪問の対象にするべきではないか」、「孤独死を無くそう」、というボランティアのはやる気持ちを押しさえ、「ボランティアにはこの訪問活動は荷が重すぎる」というボランティアには、「だれも孤独死を防ぐことは出来ない。孤独死はボランティアの責任ではない」とボランティアの領域の説明を行った。ボランティアの訪問はローテーションの当番制にしていることから、引継ぎの必要性を痛感し、入居者リストから、対象者個々のケースファイルを作成し、住居地図に落していき訪問カードを作成し、ボランティアの引継ぎのための日誌づくり等、マニュアルづくりも並行して行っていった。



【安心】

このマニュアルづくりにより、訪問も一定スムーズに行えるようになってきた。

一方、ボランティアや住民の方の、言いようのない不満も、バスツアー、お花教室などの趣味教室、各種相談等、すなわちふれあいセンターの事業の4本の柱を実施していく毎にボランティア等、また住民相互の人間関係ができたすと、笑顔に変わるようになり、少しは安定した生活が出始めてきたと思われた。が…。

こうして、ようやく持ち直したかのようにみえた活動であるが、更なる問題が待ち受けていた。

【苛立ち】

孤独死の問題が、マスコミで大騒ぎされたのに伴い、保健婦や、警察官をはじめ、他のボランティア団体が仮設での訪問を始め、それに輪をかけるかのように訪問販売等の者が仮設の戸を叩き、住民は1日中その対応に追われるようになったのである。

夏の暑い盛りであることや、仮設での不自由な暮らしで、持っていきようのないいらだちが重なった事もあるのだろう。「わしの死ぬんを見にきたんか！」「戸を叩くドンドンという音や震動に、思い出したくない地震を思い出し、訪問のたびビクビクする…」など対象者の怒りが爆発し、その不満をボランティアにぶつけるようになったのである。

ボランティアもどのように対応すればよいのかわからず社協に不満をぶつけるようになった。

～この間、社協とボランティアが真剣に訪問についての「あれこれ」を考えてきたこともつけ加えておきたい。～

【自立】

ここでボランティアが撤退しては、元も子もない。ボランティアの訪問を心待ちにしているお年寄りもいる。他のボランティアの一過性の訪問は、継続した活動に結びつかない。

見なれた顔、優しい顔がお年寄りにとって安心出来る訪問なのである。

そこで、対象者にふれあいボランティアという立場をはっきりさせるために腕章や名札を作った。このことにより、少なくとも訪問販売等とは区別できるようになり、対象者への信用にもつながったようだ。

また、せめて福祉関係機関だけでも訪問が重ならないように、個人ケースファイルを作り、保健婦が訪問する（した）事などを記入してもらい、また、ヘルパー派遣が決まっている対象者も予め記入し、ボランティアの訪問が重ならないように調整をした。

その他、訪問によって出てくる様々なニーズに対する処理として、住宅に関することは、行政所管課に本人から直接電話してもらう、福祉的なことは民生委員につなげるなど、ボランティアが抱えこまないように整理していった。

このように、試行錯誤を重ねながら、ふれあいボランティアだからできる本当の意味での「ふ・れ・あ・い」訪問を確立していったのである。

【連携】

また、福祉関係機関と民生委員の日常的なかかわりができ、ひいては、ボランティアもケース提供者として、連携がとれ実際サービスにつなげて行ったケースも少なくはない。

こういった「連携」が、後に「仮設ケア連絡会」の組織化に結びついたのである。

特に、今回は、仮設住宅という特異性もあり、ボランティアはもとより警察官（ふれあい交番）もメンバーの一員となり、各所管課からの参加も見られ、防犯・アルコール依存症・精神障害者等、福祉・保健サイドにとっての難ケースもかかわりを持ってもらっている。

要援護者の自立、福祉サービスの提供など、ケース検討を中心に、また、新規サービスの情報提供など、各関係機関等の情報の共有を図っている。

【協働】

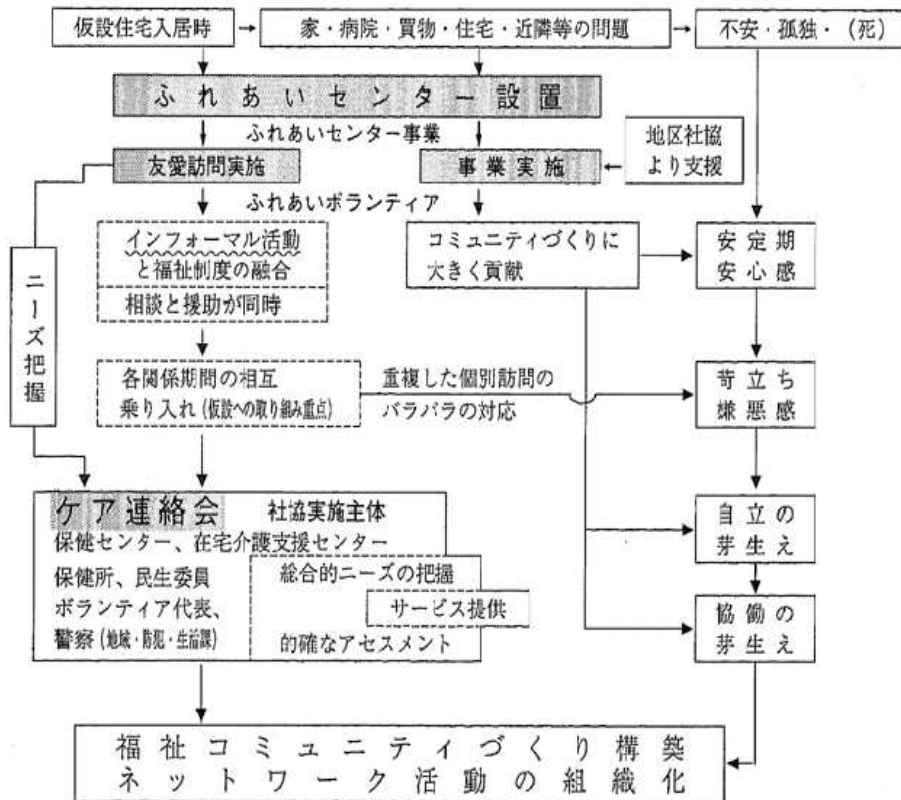
このような笑顔の訪問は、次の行事への積極的な参加へと結びつき、住民自らボランティアと協働し、ふれあいセンター事業全体がスムーズに展開するようになった。

現在市内5カ所のふれあいセンターでは毎月40近い事業を実施している。

その事業を支えているのが、夏の暑い日も、冬の寒い日も、そして雨の日も、継続して行われているボランティアによるこの活動なのである。

そして、この地道な活動は、仮設がなくなった後も地域での活動につながっていくのではないかと思う。

<ふれあいセンター事業の展開図> 孤独からふれあいコミュニティへ180°の転換



事業概要表

	事業名	事業概要	8年度への課題・展望						
交流促進事業	ふれあい交流事業	<ul style="list-style-type: none"> 仮設置地域5カ所において、高齢者を中心に、バスツアー、カラオケ昼食会他、青空市、各種季節行事、イベント等を実施し、自然な形でコミュニティづくりに反映出来ました。 <table border="1"> <thead> <tr> <th>回数</th> <th>参加者</th> <th>ボランティア</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>110回</td> <td>8,444</td> <td>2,597</td> </tr> </tbody> </table> <ul style="list-style-type: none"> 伊丹第一ホテルにおいて、平成7年11月20・21日に歌手の菊池章子氏オンステージをメインに仮設住宅を含む単身高齢者とボランティア675名を招いての「震災復興ふれあい昼食交流会」を開催。 	回数	参加者	ボランティア	110回	8,444	2,597	
	回数	参加者	ボランティア						
110回	8,444	2,597							
地域福祉活動復興促進事業	<ul style="list-style-type: none"> 社会福祉復興委員会の設置。3回開催。 仮設住宅地域をモデル指定し、60歳以上の単身高齢者と地域の単身高齢者を対象に、地域ボランティアの協力を得て、バスツアーを実施。(実績はふれあい交流事業に包含) 								
生活支援事業	日常生活支援	<ul style="list-style-type: none"> 日赤事務局として、毛布、日用品の緊急配布。 日赤事務局として、災害義援金受付窓口を開設。 平成7年3月5日～5月31日 同交付事務を実施。 避難所支援活動として、食糧・生活品の配送を実施。 平成7年1月19日～26日 2～3回/日、職員2～4名 避難所の開設・運営(市立障害者福祉センター) 平成7年2月2日～4月30日 延べ1,094人の受け入れ 生活福祉資金特別貸付(小口)の相談、受付を実施。 平成7年1月27日～2月10日 申請615件、93,350千円 生活福祉資金(災害援護資金)の貸付相談、受付を実施。 平成7年5月15日～7月31日 相談1,022件、申請28件、27,227千円 同特例貸付窓口の再開 							

平成7年10月2日～31日 相談30件、申請3件、4, 200千円

生きがい創造事業

・仮設設置地域5カ所において、高齢者を中心に、生きがいづくりを目的にお花教室、手芸教室、おり紙教室等を実施しました。

回数	参加者	ボランティア
78回	1, 573	522

また、仮設住宅の不自由な箇所を改善するため、高齢者等を対象に大工(労力) ボランティアグループが支援しました。

健康増進事業

・仮設設置地域5カ所において、月1回、保健センター、保健所の保健婦栄養士等による健康相談、心のケアセンターの心理士・ソーシャルワーカー等による心の相談を実施。また、胃がん・肺がん検診、健康診断等も実施。

他に、健康体操・スポーツ等、仮設住民の健康増進に努めました。

回数	参加者	ボランティア
72回	774	373

見守り訪問事業

・全民生委員に緊急訪問活動並びに援助活動等を実施。

2月11・12日 対象者2, 183世帯(独居・高齢・寝たきり・障害世帯)

・仮設設置地域5カ所において、概ね2日に1回程度のボランティアによる友愛訪問(3カ所)、電話訪問(2カ所)を実施し安否確認に努めました。

対象：60歳以上の単身者(60以下でも必要な方) 5カ所累計

活動日数	訪問件数	安否確認件数	ボランティア
557日	12, 202件	6, 570件	2, 572人

ネットワーク活動

・近隣共助の見守り活動を市内全域において構築すべく民生委員、地区社協と協働で実施。

要援護者1, 257人 地域ボランティア3, 021人

情報提供事業

・仮設設置地域5カ所において、月1回、たよりを発行し、各種教室、イベントなどのお知らせ等の情報を提供。

・各種行政機関、福祉関係機関のチラシ、案内等の配布。

・障害者福祉センター情報誌に仮設入居者の声を掲載・配布。

9回 660世帯全戸配布。

・仮設設置地域1カ所において、月2回、ボランティア相談員による高齢者対象の相談を実施。

・その他仮設住宅入居者に対し必要に応じた情報を提供。

(近隣マップ作成、住宅相談等)

回数	参加者	ボランティア
68回	6, 067	459

ボランティア派遣

V
コー
ディ
ネー
ト

内 容	期 間	派遣件数	延人員	備考
炊き出し	H7. 1. 18 ～4. 30	38	340	避難所
ブルーシート大工・瓦作業	H7. 1. 21 ～3. 9	145	603	屋根補修・家内整理等
物資の整理 配布等	H7. 1. 20 ～3. 31	90	1, 350	救援物資・日用品配布
介助等	H7. 1. 21 ～4. 30	56	191	避難所での介助

		送迎・運転	H7. 2. 1 ～8. 1. 31	139	170	大型荷物運搬・通 院・行事
		視覚障害者 支援	H7. 1. 20 ～2. 14	9	32	家庭訪問・広報号 外録音
		避難所訪問	H7. 1. 22 ～3. 16	22	47	激励・美容・劇
		案内・引越	H7. 3. 15 ～8. 3. 16	36	134	荷造り等・義援金 会場整理
		合 計		535	2, 867	
専門 機関 連携 事業	仮設住宅ケア連絡会	<p>・仮設設置地域1カ所（平成8年度は2カ所）において、社協が事務局となり、保健所・保健センター（保健婦）、介護支援センター（ケースワーカー）、心のケアセンター（心理士・ソーシャルワーカー）、警察（各関係課）、民生委員、ボランティア、行政（必要に応じ）で組織化し、要援護者の自立支援、サービス提供等ケース検討会を中心に、各機関より情報を提供してもらい情報を共有するため連絡会を設置、開催。</p>				

ふれあいセンター状況

(1996. 4. 1現在)

地区名	仮設数	開所月日	開設日数 (週)	開設時間	運営委員の構成	主な事業内容	社協の関わり
奥畑	280戸	H7. 6. 17 (ふれあいセンター設置)	7日	9時～17時	社協登録ボランティア	<ふれあいセンターの管理> <ふれあい交流事業> ・ふれあい訪問 ・ふれあい電話訪問 ・各種季節行事等	運営支援
車塚	200戸	H7. 7. 30 (既存の共同施設使用) H7. 9. 9 (ふれあいセンター設置)	7日	9時～17時	社協登録ボランティア	<生きがい創造事業> ・各種教室 (お花教室、カラオケ教室等) ・青空市等	
北河原	100戸	H7. 7. 8 (既存の共同施設使用) H7. 9. 1 (仮設の1室を使用設置)	奇数日	9時～17時	社協登録ボランティア	<健康増進事業> ・健康相談、心の相談 ・健康体操教室	
荻野	50戸	H7. 6. 20 既存施設 H7. 8. 15 仮設1室 H7. 12. 5 (ふれあいセンター設置)	7日	9時～17時	地区社協役員 地区福祉部員	<情報提供事業> ・各センターだよりの作成等 ★地区交流事業 (バスツアー等)	
池尻	30戸	H7. 7. 30 (既存の共同施設使用)	7日	9時～17時	地区社協役員 地区福祉部員		

	H7. 9. 9 (仮設の1 室を使用設 置)			
--	----------------------------------	--	--	--

ふれあいセンター全体にかかわる成果と課題

<p>【成 果】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 友愛訪問活動を通して出てきた福祉ニーズを民生委員や福祉機関につないでいくなど、ボランティアの福祉力が高まった。 ・ 地区社協で運営している所は、仮設事業以外にも地区行事に積極的に招待するなど、仮設のなくなった後も福祉活動が期待できる。 ・ 福祉専門機関や警察などとの、新たなネットワークが出来た。 	<p>【課 題】</p> <p>今後、このセンター事業をいかに地域活動に生かしていくか。 (拠点の整備、ボランティアの活用、地域活動の充実等)</p>
--	--

宝塚市社会福祉協議会

震災直後からの一時のボランティアブームが去って行く中で、具体的な活動を1年間にわたってボランティアや地域住民を中心に展開することができたことは、今後のボランティア活動振興にとって大きい意味を持つ。

加えて、行政では手のまわらない生活に密着したニーズに対して、住民自主の復興活動によって対応することができた。いずれの事業も実際に活動するボランティアの創意工夫で初期に想定していない活動展開を行い、より多くの市民によるこんでいただける活動となった。

こういった数多くの活動の中より、仮設住宅改良事業とKDD寮のふれあい事業について報告する。

1. 仮設住宅改良事業について

県、市でも、高齢者・障害者にとって生活上不都合の多い仮設住宅の住環境改善について、多くの苦情を受けて、入り口とベランダ部分の軒の設置、エアコンの設置等を行った。しかし、「入り口や浴室の段差が大きすぎる」「ユニットバスが狭すぎて入りにくい」「棚が高すぎて使えない」等々個別のニーズに対応した改造までは手がまわらない状況であったため、このニーズに対応するべくボランティアグループ「でえくさんず」を中心に仮設住宅改造事業を実施した。「でえくさんず」は震災後屋根のシート張りや引っ越しの手伝いをしてきた人たちが集まって結成された日曜大工ボランティアグループである。活動の中で得た居住者のニーズにより、西日対策や寒さ対策についてもボランティアレベルでの対応方法を検討し対策を講じた。主な改造箇所は以下の通りである。

- ・入り口部分のブロックによる段差解消、手すり設置
- ・風呂場入り口の踏み台設置、手すり設置
- ・ユニットバス内バスボード設置、手すり設置
- ・棚の設置
- ・西日対策（寒冷紗によるよしず効果）
- ・寒さ対策（目張り、床下の風よけ、天井のすきま対策、カーテン設置）
- ・ドアの修理
- ・ドアや引き戸にとってをつける
- ・物干し竿をかける金具を作る
- ・すきまのできた天井を埋める

「でえくさんず」がこの1年間、仮設住宅の改造、修理活動をする中で、気づいたことがある。それは今後仮設住宅を建てる時にはこうしたらいいのといった提言でもある。例えば、仮設住宅を南向きに建てるとか、天井に断熱剤を入れるとか、床に新聞紙をひきクスリをまくとか、ひさしはドアや物干しの部分だけでなく全部あったほうがいいのか、以上の点を「でえくさんず」は今後の災害時の仮設住宅建設にいかしてほしいと切に感じている。

2. 単身者仮設住宅（KDD寮）ふれあい事業

- ・会食会 2箇所毎月1回13回実施延べ358人参加。
- ・話し相手、相談事業 延べ相談者数111名

この仮設住宅は高齢者・障害者の単身者がほとんどということで、会食会の開催まではほとんどの人が部屋で1人で食事をし、同じ入居者とも挨拶を交わす程度であったのが、目に見えて関係がよくなった。中にはいじめがなくなったという居住者もいる。会食サービスは、連合婦人会が総合福祉センターで調理をしてからKDD寮に運び、再び少し手を加えてから、居住者と連合婦人会員が話しをしながら楽しくいただく。話しの中には居住者間のもめ事や困っている事が出てくることもあった。そういった問題も居住者間だけで、こじれていくのではなく、第三者に聞いてもらえるため、かえって、よい方向へもっていけることもあった。居住者と一緒に食事し、話し、カラオケを歌い、踊ることで、気持ちの上でもストレス発散できたとし、回を重ねるごとに親しみのこもったよい関係となっていく。

また、会食サービスから宝塚市連合婦人会ボランティアによる話し相手、悩み相談の事業に発展、12月より週3回2名ずつが仮設住宅に向いて話し相手、悩みの相談を実施した。

相談というよりも、お茶でも飲みながら気軽にお話ししましょうと呼びかけていったところ、身近なものとなっていった。居住者にとって、仮設住宅を出た後、どこへ住むかというのが悩みであるが、相談して直接的解決できなくても、ゆっくりときいてくれる人の存在が気持ちの支えになった。相談事業は、居住者にとって誰か聞いてくれる人がいるという安心感をもたらした。

事業概要表

事業名	事業概要	8年度への課題・展望
-----	------	------------

	数						
野上	150世帯 126世帯	H7. 7	毎日	決ま てい ない	自治会12名	夏祭り、昼食会、秋の心祭、炊き出し、消防訓練	情報提供 メニュー提 供
高司	150世帯 135世帯	H7. 7	毎日	〃	自治会12名	夏祭り、健康診断、コンサート、消防訓練、炊き出し	〃
山手台	90世帯 68世帯	H7. 8	週3日	〃	自治会を中心としたメンバー10名	カラオケ大会、餅つき、キムチ講習会、毎週火曜手作り教室、毎週水曜マーじゃん教室、卓球教室	〃
すみれが丘	70世帯 59世帯	H7. 8	毎日	〃	自治会 6名	ふれあいパーティ、クリスマスパーティ、毎週第1、3木曜住民相談、第4金曜健康教室	〃
売布東	148世帯 125世帯	H7. 8	週3日	〃	自治会を中心としたメンバー 7名	料理教室、漫才と落語、押し花体験教室、定期清掃活動	〃
宝梅	110世帯 91世帯	H7. 10	毎日	〃	自治会を中心としたメンバー 6名	炊き出し、卓球同好会、カラオケ大会、消防訓練、健康講座、体操教室	〃
北雲雀	172世帯 106世帯	H. 7. 10	毎日	〃	自治会を中心としたメンバー 9名	料理教室、青空市、鏡開き、毎週第1、3木曜お花教室、第2、4木曜お茶教室、毎週木曜ヨカ教室	〃
安倉北	65世帯 57世帯	H. 8. 3					〃
中山中央公園	98世帯 81世帯	H. 8. 3					〃

ふれあいセンター全体にかかわる成果と課題

【成 果】	【課 題】

三木市社会福祉協議会

(移動入浴車を利用したふとん乾燥サービス)



事業概要表

	事業名	事業概要	8年度への課題・展望
交流 促進 事業	ふれあい会食会	毎月2回おおむね65歳以上の高齢者を仮設住宅の一家に招き、いずみ会の協力で実施（H7～延783回）H. 8. 1よりふれあいセンターで実施	継続実施
	ふれあい喫茶	毎週月曜日、入居者が自由に交流できる場としてサロンを開催（10：00～14：00）（H. 8. 1～ 延参加人員387名）（グループいい日が開設）	継続実施
	リフレッシュコンサート招待	三木市文化会館でのキム・ヨンジャリサイタルに招待9/23 参加者35名（三木市社会福祉協議会、緑が丘町福祉委員会、緑が丘ボランティアセンター共催）	計画的に招待
	ふれあい花壇づくり	各仮設住宅の南側に花壇及び野菜畑を設置、また空き地、ふれあいセンター周辺にも設置、季節ごとに花の苗くばり（緑が丘町老人会、三木市老人会連合会）	花の苗等の配布のみ。管理は住民で
生活 支援	巡回訪問	地区担当民生委員及び三木市社協事務局長とが週一回程度定期的に巡回訪問	隣近所の連携を深める事業の実施

事業	心配ごと相談所の開設	月1回、ふれあいセンターで仮設住宅住民のなやみごと相談の実施 専任相談員1名、事務員1名、社協職員1名 計3名で平成7年12月より毎月1回開催 相談件数83件	継続実施
	健康相談	月2回 内科医、精神科医交互で平成7年7月より実施 延相談件数285件	継続実施
	ホームヘルパー派遣	仮設住宅要介護者に対するヘルパー派遣 (対象者5名 平成7年6月7日より開始、221回 320時間)	
	ふとん乾燥	平成7年9月より毎月2回程度実施 実施日数14日 乾燥ふとん数延432枚	継続実施
V コー デー ネー ト	編物教室の開催	毎月2回 教室生8名 平成7年12月1日より実施	継続実施
	単発的イベント開催	もちつき大会、バザー、バーベキュー大会等	各種イベント調整
	歳末愛のもちより運動	市民の住民からの愛のもちより金により、全戸にこたつぶとん贈呈、夏ぶとん贈呈	年2回実施
専門 機関 連携 事業		保健所、市福祉課、長寿福祉課、健康課、民協、社協による要援護者に関する連絡会議 月1回開催、平成7年6月より	継続

ふれあいセンター状況

(1996. 4. 1現在)

地区名	仮設数	開所月日	開設日数(週)	開設時間	運営委員の構成	主な事業内容	社協の関わり
緑が丘	80	H. 7. 12. 1	7日	9:00~17:00	三木市社会福祉協議会 事務局長 緑が丘区長協議会長 〃 福祉委員会委員長 〃 担当地区民生委員 児童委員 仮設住宅入居者代表 ボランティア (事務局 市福祉課、長寿福祉課、健康課、三木保健所)	1. 仮設住民相互及び近隣地域等とのふれあい 交流事業 2. 趣味を生かす生きがいづくり事業 3. 心配ごと相談等の生活支援事業 4. 生活情報提供 5. 心身の健康増進事業	1. 運営委員長として各種の事業運営調整 2. 各種イベントの計画実施及び参加協力

ふれあいセンター全体にかかわる成果と課題

<p>【成果】</p> <p>平成7年12月1日よりふれあいセンターが開設により、交流及び事業の核となる場が生まれ、平成8年1月より本格的な事業運営にはいる。</p> <p>住民間の交流と地域との交流が生まれ、生活がおちつき、それとともに相談業務も本格化した。</p>	<p>【課題】</p> <p>退去世帯が増加するにつれて、今後ふれあいセンターが住民にとって、唯一の心の安定に寄与する場となって来ている。</p> <p>今後、地域住民との交わりを深める交流をすすめるとともに、要援護者に対する支援活動をすすめることがより重要となる。</p>
--	---

(c)1997神戸市社会福祉協議会、兵庫県社会福祉協議会阪神・淡路大震災社会福祉復興本部 (デジタル化：神戸大学附属図書館)

川西市社会福祉協議会

1. ほのぼの会食会でふれあい広がる

川西市では、平成7年2月下旬から3月下旬にかけて3ヶ所に仮設住宅が建設された。7月2日には、3ヶ所ともに「ふれあいセンター」がオープンし、入居者自身による“ふれあいセンター管理運営委員会”が組織された。

川西市社会福祉協議会では、兵庫県社協から「地域福祉活動復興促進事業助成」を受け、社協の組織をあげて仮設住宅や地域の被災者への支援事業を様々な形で取り組んできた。ここでは、「仮設ふれあいセンター」支援事業の一つとして重点的に取り組んできた“ほのぼの会食会”を紹介する。

“ほのぼの会食会”は、高齢者や障害をもつ人を対象に震災で住み慣れた住宅や地域を離れて入居し、近所づき合いも少なく落ち込んでふさがちな気持ちを、会食会を通じて少しでも入居者同士のふれあい交流と心身のリフレッシュがはかられたらと、8月から月1回のペースで実施した。

本会では、従来から週2回の給食サービス事業を実施しており、この事業を活かして支援活動に役立てようということになり、通常の給食日以外の曜日で、会食会をすることになった。献立作成グループと調理ボランティアが、社協からの依頼に快く協力していただき、毎回40食～60食の弁当を調理した。

開催時には、社協事務所で毎回の会食会の参加の呼びかけピラをつくり、各戸に案内し仮設ふれあいセンターの役員の協力を得て参加を募った。

会食会の内容としては、はじめにお年寄りにもできる軽い体操や、ヨーガ、手足のマッサージ、つぼ押さえ等を健康体操関係のボランティアグループの協力を得て行った。身体もほぐれ汗もかき、スッキリとした後で、お待ちかねの弁当を開いての会食である。弁当の内容は、毎回季節の素材を取り入れ、ボランティアの人達が心をこめて調理したもので見た目にも味もよく、家庭的で「おいしい」と好評であった。ちなみに、1月の会食会の弁当は、おせち料理で新年を祝った。

車座になったり、テーブルで弁当を食べながら、各々隣同士の会話が少しづつ広がっていく。おいしい弁当を皆んなで食べることで、うちとけて楽しい一時となったようである。

この会食会には毎回のようには仮設支援をしている地元の社協地区福祉委員会のボランティア部会の人や、仮設担当の民生委員、そして社協の職員（事業担当、保健婦、ホームヘルパー）や市の職員（ケースワーカー、保健婦）も参加し、入居者に交って食事とおしゃべりを楽しみ、交流とさりげない状況、ニーズ把握と励ましをしてきた。

会食の後は、懇談や市や社協から保健福祉関係サービスの情報紹介、相談を、また希望者には保健婦による血圧測定と健康相談を行うといった内容である。

“ほのぼの会食会”は、平成7年度中で各仮設7回づつ、合計21回の実施となった。

こうした会食会を通して、高齢者を中心として入居者相互のふれあいやつながりが徐々に広がっていった。「はじめの頃は淋しかったが、この頃ずい分楽しくなってきた」「会食会での色々な人のおしゃべりやふれあいが楽しい」という参加者からの感想も聞かれた。ある仮設では、会食会での交流が老人クラブの発足に間接的に結びつくという入居者自身の仲間づくりの活動につながったところもある。特にひとりぐらしの高齢者や病気がちの人は、部屋に閉じこもっていたのでは気持ちもふさが、孤立しがちになるが、その都度仮設の役員やボランティア、民生委員、社協や市のスタッフによる参加の呼びかけ訪問で、安否確認をはじめ家から外へ連れ出したり声かけの中で、その時々身体の調子や生活の状況等もある程度把握することができた。

他市のあちこちの仮設で孤独死のニュースを聞くにつけ、“川西の仮設から孤独死を出さない”ことが、ふれあいセンター役員をはじめ、市、保健、福祉、警察、消防署等関係機関の共通の重点目標となっており、会食会、懇談会の中でも初期のころ“この仮設から孤独死を出さないよう皆んなでお互いに声かけ合いましょ”と話し合いを何度かもち意識を高めていった。

孤独死を出さない取り組みは、仮設の役員や入居者、及び親族をはじめ、警察や消防、近隣、ボランティア、民生委員、保健、福祉関係機関の職員等々の取り組みによって、川西市では現在のところおかげさまで1件も出ていない。

“ほのぼの会食会”の当初の目的である高齢者を中心とした入居者同士のふれあい交流は、ある程度目的を達したと言えるが、1年を過ぎて、若い人や経済力のある世帯の転出等、様々な状況変化の中で、高齢者や経済力の弱い世帯が取り残される形となってきており、「これからも続けてほしい」という声を大切にしつつ、状況に見合った形で“ほのぼの会食会”を平成8年度も実施していく必要がある。

2. 一泊バスツアーで心身ともにリフレッシュ！

今回で16回目となる「ひとりぐらし高齢者バスツアー」であるが、平成7年1月の震災の影響もあり、事務局内部でも開催等についてかなり協議を行った。事業計画の段階では、例年どおり“日帰り”の予定であったが、県社協他の助成金を活用すれば、なんとか一泊できるのではないかと、この時期だからこそ一泊で行う価値がある、ということで、初めて“一泊二日”のバスツアーの実施に結び付いたのである。この決定は、前回のバスツアー参加者の中から10名の方に「楽しいバスツアーにする会」（実行委員会）で集まっていたいただき、日程、行き先、内容などを検討していただいた結果で、行き先については意見が分かれたが、日帰りか一泊かの選択については、全員一致で即決した。川西市は、他の被災地に比べれば被害も小さかったが、ひとりぐらしのお年寄りにとっては、かなりショッキングな出来事であったに違いないと痛感させられた。

宿、バス、予算の関係で募集定員を120名としたが、正直言って何人集まるのか、見当もつかなかった。でも、150名を超える方が

ら応募があり、あらためてこのような場の必要性も感じた。(30名ほどの方には非常に心苦しい結果となったが..)

行き先は岡山方面(鷲羽山、備前焼体験、湯郷温泉)で、スケジュールもゆったりと組み、夜は宴会でおいしいものを食べたり、温泉につかったりと、心も身体もリフレッシュしていただけたと思う。また、備前焼体験では、実際に土をひねり、湯飲みや皿などを作ったのも好評であった。

震災被災者支援活動の一環として行った「第16回ひとりぐらし高齢者バスツアー」であったが、単に楽しいだけのツアーではなく、参加者全員がひとりぐらしということで、すぐに打ち解け合い、交流の輪が広がったり、いろいろな不安、ストレスの解消になったり、明日への活力につながったりと、被災者の自立につながる、有意義なツアーが実施できたのではないかと思います。

最後に参加者のアンケートの中から一部を紹介し、まとめにかえたいと思う。

- ・「今回初めての参加でしたが、皆様との楽しいふれあいができ、とても嬉しかった。」
- ・「楽しい2日間の旅にいつそう元気ができました。」
- ・「一泊旅行で知らない方と仲良くなれ、話し合ったりできて大変良かった。」
- ・「ひとりぐらししている者には、こんな楽しい会(バスツアー)はないと思います。」
- ・「大勢の人とご一緒でき、たのしい2日間でした。」
- ・「年に1回と言わず、2~3回このような旅行をしてほしい。」
- ・「とても良い思い出になりました。」



(ひとりぐらし高齢者バスツアー)

事業概要表

	事業名	事業概要	8年度への課題・展望
交流促進事業	1. ほのぼの会食会	仮設入居の高齢者・障害をもつ人を対象に、月1回ふれあいセンターにて会食会として健康体操懇談、情報提供、血圧測定、健康福祉相談を行い、入居者間の交流と心身のケアをはかった。 3仮設で延21回開催 457名参加	当初の目的「高齢者間のふれあい交流」は達成されたが、他の世代との交流をはかるため、年齢枠をはずして対象を広げて実施。
	2. いきいき健康体操(リフレッシュ事業)	仮設入居者全員を対象に、健康体操や気功、レクリエーションなどをボランティアより指導していただき楽しみながら身体を動かし、心身のリフレッシュをはかった。 2仮設で延8回開催 102名参加	参加者が少ないこともあり入居者の自主的な希望を受けた形で対応していく方向。
	3. ひとりぐらし老人のバスツアー	ひとりぐらしの高齢者(仮設、及び地域)を対象に震災による心身の疲れを温泉での一泊旅行で心身のリフレッシュをはかった。 参加者120名 バス3台 湯郷温泉他	一泊で温泉ということで、大変好評であったことから8年度も同じパターンで実施の予定。
	4. 介護者リフレッシュのつどい	痴呆性老人、及び介護する家族を対象に保養センター等でつどい、懇談、レクリエーション、懇親を行い介護者のリフレッシュをはかった。 2回開催 参加者37名	大変好評であったので8年度でも継続実施する予定。
	5. ゆ〜ゆ〜入浴	仮設入居の60歳以上の方を対象に、福祉施設清和苑との共催で同苑の風呂、和室を活用し、入浴や懇談、会食で心身のリフレッシュをはかった。 1回開催 参加者13名	清和苑の単独実施
	6. 仮設住宅での「もちつき大会」	3ヶ所の仮設住宅近隣の6地区福祉委員会と仮設ふれあいセンター管理運営委員会との共催で仮設入居者、及び近隣住民の参加でもちつき大会を実施し、住民交流と激励をはかった。 3仮設で各1回開催 450名参加	大変好評であったので8年度も継続実施する予定。

7. ひとりぐらし老人の集い	市内11の地区福祉委員会において、被災により落ちこんだり、孤立しがちな地域、及び仮設のひとりぐらし老人を対象に、会食やレクレーションを中心とした集いを開催。ひとりぐらし老人相互の交流と元気づけ、ひとりぐらし老人の会の組織拡大をはかった。 延11地区で開催 340名参加	大変好評であったが、予算の関係で地域福祉復興促進事業としての位置付けでは困難なため、日常の各地区福祉委員会事業の中で可能な範囲で行っていく。
1. 仮設ふれあいセンターでの心配ごと相談会	仮設ふれあいセンターにおいて、月1回心配ごと相談員が入居者の生活上の心配ごととの相談に応じ、心配ごととの解決をはかるもの。 3仮設で延18回開催18件の相談	“相談会”ということに抵抗感もあり来談者が少なく、もっと気軽に相談できるように工夫が必要。一方で、高齢者等何らかの生活、福祉上の悩みをかかえる世帯が多く残ってくる中で、相談会の継続が必要と思われる。8年度も継続実施。
2. 仮設ふれあいセンターでの法律相談会	仮設ふれあいセンターにおいて11月に3仮設で各1回、弁護士に依頼し、法律に関する相談に応じ問題の解決をはかるもの。 3仮設で各1回開催 3件の相談	入居者の根本的な悩みは“住宅問題”が多く、案外法律関係の相談が少ないため、8年度は実施しない。
3. 健康福祉相談	各仮設ふれあいセンターで実施した“ほのぼの会食会”（高齢者・障害をもつ人が対象）の後で、健康上・福祉上の悩みや不安のある方に対し、社協と市の保健婦で血圧測定と健康相談を、また、社協、市福祉事務所職員で福祉サービス等についての情報提供と相談を受けた。 3仮設で延21回開催 223件	“相談会”と名うっての相談は少なく、会食会等の催しの中で受けとめていく方が効果的と考えるが、会食会そのものへの参加者の減少傾向の中で、参加対象枠を広げていく必要がある。8年度も会食会と抱き合わせて実施予定。
4. ホームヘルプサービス	仮設住宅入居のひとりぐらし老人等、要援護世帯へホームヘルパーを派遣し、家事・介護サービスを行い生活支援をはかった。 派遣世帯13世帯 延510回派遣	仮設入居の高齢者・障害者等要援護世帯のニーズに基づいて8年度も継続。
5. 給食サービス	仮設住宅入居のひとりぐらし老人等、要援護世帯の中で給食サービスを必要とする世帯に対し、週1～2回の給食サービス（配食）を行い、生活の支援、安否確認を行った。 配食世帯16世帯 延395食配食	”
6. ひとりぐらし老人等の見守り、声かけネットワーク活動	仮設住宅入居者、及び地域のひとりぐらし老人等を中心として、孤独死を出さないために近隣地区福祉委員会のボランティア部会、及びボランティアグループの協力を得て、定期的に声かけ、見守り活動を行った。 767件 延1, 132回	仮設入居者については、高齢者等要援護世帯が多く残される状況の中で、今後益々見守り、声かけ活動が重要となるため、8年度も継続実施。
7. 緊急連絡帳の配布・非常用インターホン設置	ひとりぐらし老人世帯等へ緊急時の連絡用台帳の配布、及び非常用インターホンを設置。 緊急連絡帳配布枚数 52枚・インターホン 2セット	ニーズに基づいて8年度も継続実施。
8. 要援護世帯への個別援助活動	仮設近辺の地区福祉委員会、ボランティアグループにより、仮設入居者の高齢者、障害者等要援護者への受薬、買物、話し相手等の個別援助活動を行った。 30件 延340回	要援護世帯が多いところから、今後も特に継続実施が必要。
9. 移送サービス	リフト付ワゴン車の確保と貸出し運用により、障害者や車イス利用者の外出、通院等の移送の便宜をはかるもの。家族で運転手を確保できない場合は、運転ボランティアの協力で実施。 延利用35件	障害者の社会参加、外出ニーズは増加しており、今後もさらにPRを行い、継続実施。
10. 震災復興事業に伴うボランティア派遣	震災登録ボランティア、及びボランティアセンター登録のボランティアグループにより、仮設入居者の要援護世帯からのニーズにより荷物の運	仮設入居の高齢者や障害者等、要援護世帯からの

生活支援事業

	<p>瀬、車イス介助、住宅改造、他行政からの依頼による援護物資の整理等を行った。</p> <p>延コーディネーター件数52件</p>	<p>ニーズに基づいて、今後もボランティア派遣を行っていく。</p>
	<p>11. 仮設入居者への歳末配分</p> <p>歳末たすけ合い運動の中で、仮設入居者全世帯へ年末に調味料セットを配布し、生活に一助とするもの。</p> <p>配布世帯423世帯 総額740,673円</p>	<p>8年度も継続実施について、歳末配分委員会にはかかる。</p>
	<p>12. 車イスの設置</p> <p>仮設入居者がいつでも必要な時、車イスが使えるよう各仮設ふれあいセンターに車イスを設置した。</p> <p>3仮設に計8台</p>	<p>必要に応じて継続実施。</p>
専門 機 関 連 携 事 業	<p>1. 仮設ふれあいセンター支援事業 保健・福祉・警察・消防署との連携</p> <p>(1) 仮設ふれあいセンター支援事業、及び声かけ、見守り活動推進に伴う打合せ、関係者調整会議をもち、連携をはかった。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・実務担当会議 9回開催 ・仮設ふれあいセンター役員との調整、打合せ会 5回 <p>(2) 声かけ、見守り活動</p> <p>関係者が定期的、不定期に入居者への訪問、声かけを行い、連絡表にチェックしていく。</p> <p>(3) 仮設住宅支援ボランティア関係者会2回開催</p>	<p>仮設入居者が存在する限り、今後必要。</p>
	<p>2. 各仮設ふれあいセンター役員交流座談会</p> <p>3仮設ふれあいセンター役員との交流座談会。</p> <p>1回開催17名参加</p>	<p>8年度も実施の予定。</p>
	<p>3. 仮設入居者への保健婦訪問による保健衛生援助</p> <p>仮設住宅入居の中で、保健、健康上訪問援助の必要世帯を訪問し、相談や必要な手だてを行うもの。県保健所、市保健センター、市高年福祉課と社協の保健婦は高齢者世帯を担当し、下記のとおり行った。</p> <p>対象世帯38世帯 延306訪問</p> <ul style="list-style-type: none"> ・市内保健婦連絡調整会議 31回開催 	
そ の 他	<p>1. 仮設ふれあいセンター活動器材の整備支援</p> <p>関係機関内の見守り、声かけ活動用台帳の保管用のレターケースの整備をはじめ、交流活動用のカラオケセット、碁盤セット等を市民に公募し、各センターへ設置。</p> <ul style="list-style-type: none"> 1) 見守り活動用レターケース 3 2) カラオケセット碁盤セット他 11 	<p>8年度ふれあいセンターから新たなニーズがあれば対応を見当していく。</p>
	<p>2. 仮設ふれあいセンター運営への活動助成</p> <p>歳末たすけ合い運動の中から、仮設ふれあいセンター運営への活動助成金として各10万円配分した。3仮設ふれあいセンターへ 計30万円</p>	<p>8年度も継続実施について、歳末配分委員会にはかかる。</p>
	<p>3. 震災登録ボランティアのつどい・講演会</p> <p>(1) 震災救援活動ボランティアのつどい</p> <p>震災救援ボランティア活動報告と反省会を行い、併せて慰労会を行った。</p> <p>1回開催 160名参加</p> <p>(2) 震災ボランティア講演会</p> <p>震災時に登録、及び活動したボランティアを対象に、平常時にもボランティア活動に参加してもらうことを目的に講演と情報提供を行った。</p> <p>5地区で延5回開催 延215名参加</p> <p>(3) ボランティアリーダー研修会</p> <p>震災時、また平常時に求められるボランティアリーダーを育成していく目的で実施。</p> <p>2回開催 延118名参加</p>	<p>災害時のボランティア活動に備えて8年度も「災害ボランティアのつどい」として開催。</p> <p>8年度は震災登録ボランティアへの情報提供を主に、ボランティア講座の受講や活動への参加を働きかける。</p> <p>今後も特に必要とされるため、8年度も継続実施。</p>
	<p>4. 社協第3次発展計画の中に「災害時における社協の役割」の明記</p> <p>第3次川西市社協発展計画（地域福祉推進プラン）策定の中で、今回の大震災を教訓にして「災害時における社協の役割」等について盛り込み作成。</p>	

ふれあいセンター状況

(1996. 4. 1現在)

地区名	仮設数	開所月日	開設日数(週)	開設時間	運営委員の構成	主な事業内容	社協の関わり
久代	76	H7.2.2	5(平均)	9:00~17:00(必要に応じて変更)	仮設入居者による委員構成 委員長1、副委員長2、書記1、会計1、他委員	・各種相談(健康、心配ごと他) ・茶話やかサロン ・各種ふれあい交流事業他 ・ゆ~ゆ~入浴	・心配ごと相談ふれあい交流事業実施、またイベントへの協力他
南野坂	45 99(西宮) 144	H7.2.2	5(平均)	9:00~19:00(必要に応じて変更)	〃	・各種相談(健康、心配ごと他) ・ふれあい喫茶 ・カラオケ ・ゆ~ゆ~入浴・いけ花 ・うどんサークル活動 ・各種ふれあい交流事業他	〃
丸山台	132 17(西宮) 149	H7.2.2	5(平均)	9:00~17:00(必要に応じて変更)	〃	・各種相談(健康、心配ごと他)・茶話やかサロン・ゆうあいセンター入浴・各種ふれあい交流事業他	〃

ふれあいセンター全体にかかわる成果と課題

<p>【成果】 仮設入居者自身によるふれあいセンター管理運営委員会ができたことにより、役員をはじめ入居者自身の自助活動が積極的にされたこと、関係機関、また社協としてもボランティアや地区福祉委員会の協力のもとに入居者ふれあい交流、生活の支援、精神的な支えがかなりできた。特に声かけ、見守り活動をよくされたことで“孤独死”を出さずに1年間終えることができた。</p>	<p>【課題】 時が経つにつれ、若い世帯や経済力のある世帯は恒久住宅へ転居されていくが、高齢者へ経済力のない世帯がとり残される傾向が強く、ふれあいセンターの運営体制自体の困難とそれに伴う支援、個別世帯への支援が益々必要とされる。</p>
--	---

津名町社会福祉協議会

おばあちゃんの知恵を孫に...と

平成7年7月3日、ふれあいセンターが開設した。ボランティア連絡会が町から運営をまかされてはじまった。最初は、県の方から事業を定められ、型にはまった事業を実施していかねばと...考えていたが、ふれあいセンター事業を実施して行く中、「仮設でのボランティア活動をしたいのですが何かありませんか」と仮設住宅へのボランティア活動が住民・小中学生・高校生等の声が高まってきた。

最初の取り組みは手芸教室の実施である。手芸ボランティアといっしょに仮設の方々をお誘いした。

手芸ボランティア（シニア）は65歳を越えた方々もたくさんおり入居者の方と同年齢の気安さがあった。また、学生ボランティアの参加を得て、中学生・高校生も混じえての「ぬいぐるみのねこ」作りをはじめた。耳を切るとき、ボランティアや仮設の方々にどうして切ったらいと訪ねたら、「斜めに切ったらほつれてこうへんからこうやって切ったらいい。」とか、「糸をあんまり長くしたらもつれるし、もったいない。」という会話が聞こえてきた。それに子供たちも「ほんまやな、さすが長生きしているぶん、かしこいわ。」といいながら和気あいあいと手芸に取り組んでいった。

こうした会話の中で、学生はボランティア活動を学校を通さないで自然の取組のなかで自ら行っていくようになった。また、シニアボランティアも自然と孫に教えるようにして高校生等との楽しい世代交流を行っていた。強制しなくとも、また「ボランティア」ということに縛られないで、誰でも、何処でも、いつでも出来るボランティア活動がふれあいセンターの場で展開されている。今回、ふれあいセンター設置に伴い、ボランティア連絡会が運営し高齢者の自立を支援するとともにコミュニティ形成の場やボランティアの啓蒙の場として活用している。また、小・中学校・高等学校が、お年寄りとの交流会・復興コンサートなどを実施している。

これからも、地域の人たちがだれでも自然に入ってこれるノーマライゼーションを基本にふれあいの場づくりを仮設住宅の場で進めていきたい。



事業概要表

	事業名	事業概要	8年度への課題・展望
交流 促進 事業	・ふれあい交流会	・町内 小・中・高等学校と高齢者との交流会。 各文化クラブの児童生徒の作品づくり ・他社協との交流会（春日町・西紀町）	継続実施
	・バスツアー	・四国徳島への入浴招待（参加者 45名）	
	・入浴体験	町内施設「いい湯だな」へ入浴体験実施 月1回（参加 延べ人数 300名）	
	・花壇づくり	各家庭の玄関先プランターに季節の草花植えを実施	
生活 支援 事業	・清掃活動	町内 中・高等学校の生徒が各家庭に訪問し、風呂場・換気扇・トイレ・窓拭き等を実施。	継続実施

V コー ディ ネー ト	・ミニ喫茶	・ボランティアグループが中心になり仮設住民がコーヒー・紅茶を飲みながら地域の人たちと自由に交流できる場作りを設置	継続実施
	・各種教室の開催	・ヨガ教室（月2回開催） カラオケ教室（月1回） 手芸教室	継続実施
専門 機関 との 連携 事業	・健康相談	町保健婦月2回健康相談事業実施。 医師による健康のお話実施（月1回）	継続実施

ふれあいセンター状況

(1996. 4. 1現在)

地区名	仮設 数	開所月日	開設日 数 (週)	開設時間	運営委員の構成	主な事業内容	社協の関 わり
志筑新島	142	H7. 7. 3	毎日	9:00~17:00	津名町ボランティア 連絡会	<ul style="list-style-type: none"> ・心身の健康増進につながる事業 ・高齢者の生きがい創造につながる事業 ・住民相互や近隣地域とのふれあい交流事業 ・友愛訪問 ・相談活動 	ボラン ティア連 絡会と仮 設住民と の間に入 り行事等 の調整 役。 各種イ ベントの 参加、協 力

ふれあいセンター全体にかかわる成果と課題

<p>【成 果】</p> <p>仮設住宅に住む、高齢者等のニーズ調査（ボランティア各世帯聞き取り調査）を実施。ニーズ把握をし、心身両面にわたり、健康相談・福祉生活相談、また住民（一般・小・中高等学校）からのケアを行い、高齢者等の自立を支援するとともにコミュニティ形成の場やボランティアの活動拠点として、ボランティアの啓蒙の場として活用した。</p>	<p>【課 題】</p> <p>高齢者等のケアは充実しているが、242世帯が住んでいる中で子供らへのケアが出来ていないように思うので、子供がいる世帯のニーズ調査を行い、行政・学校・家庭・関係機関等に連携を取りながら子供らに対するケアを考えていきたい。</p>
--	---

(c)1997神戸市社会福祉協議会、兵庫県社会福祉協議会阪神・淡路大震災社会福祉復興本部 (デジタル化：神戸大学附属図書館)

淡路町社会福祉協議会

1. カラオケの集い

午後1時過ぎ、ふれあいセンターにお年寄りが、ぼつぼつやってきます。

毎月第四日曜日は、ふれあいセンターでカラオケの集いが開催される日です。

思い思いに、お気に入りのテープや歌詞カードを持参し、やってきます。

カラオケの集いは、ボランティアグループ「ひまわり」のメンバーが司会進行、セッティング、会場の準備を行っています。

午後1時30分過ぎ、司会の紹介にあわせてカラオケの始まりです。

ジュースやお茶・コーヒー等、のどを潤わせ、また、お菓子をつまみながら談笑を交え、手拍子とともに和やかな時を過ごします。

回を重ねるごとに、カラオケだけに止どまらず、曲にあわせて即興の踊りが飛び出したりします。また、得意の手品を披露していただけることもしばしばです。

先日も、地元の祭りの歌が飛び出し、手拍子が始まりだれともなしに、合いの手が入り、アツという間に輪ができ、踊りのはじまりです。

昔から誰もが知っている歌、知っている合いの手、その歌を聞いただけで、体が自然に動き、曲にあわせてついつい歌って踊ってしまう。

祭りの風景を誰もが思い出す。...

同じ地域に長年住み慣れたもの同士の絆のような連帯感を覚えたりします。

手品を披露してくれるおじさんは、寝たきりの母親と仮設住宅に暮らしています。日頃の家事は勿論のこと、寝たきりのお母さんのお世話もなされています。

お母さんが元気な頃は、老人クラブや老人大学の行事にも積極的に参加をしていましたが、今は家を長時間留守にできないこともあって、参加していません。

あまり外出ができないおじさんにとっては、この集いは気分転換であり、心も体もリフレッシュできる場となります。ふれあいセンターは、歩いて1分もかからない所にあるので、安心して楽しい時間を過ごせるようです。

月に一度のカラオケの集いは、歌あり・踊りあり、そして手品ありの、さながら演芸会の様子です。

カラオケの集いの集大成として、年に二回・カラオケ大会を開催しています。定期的に集うようになって、みなさんに楽しみにしていただいているようで、嬉しく思っています。この日のために練習を重ねてくる人もいます。

日頃は、となりのドアの音やテレビの声、水を流す音までも気にしながら、音に敏感になりがちな仮設住宅生活にとって、大きな声でまわりを気にせず、話をしたり、心おきなく歌えること、ワイワイ・ガヤガヤ...家庭にこもりがちな人にとって、楽しいひとときとなります。人が集まる。人とおしゃべりをする。人と食を共にする。

何気ない人との関係が希薄している生活で、人とのかわりが必要で、重要になってきます。人とのコミュニケーションをとるうえで、カラオケの集いもひとつの役割をなしているように思われます。



2. 一日旅行・徳島遊湯館

「ゆっくり、のんびりお風呂に入って、疲れをとってもらおう。」と、遊湯館への一日旅行を計画しました。

仮設住宅に住むお年寄りは、震災以前は町の銭湯へ毎日通っていた人がほとんどです。

仮設住宅のお風呂は狭く、トイレと並んでいる様式では、長年入っていた銭湯や日本式のお風呂に慣れているお年寄りにとって

は、苦痛であり好んで利用しない様子です。特に冬場は寒くて風邪を引くといっって、ほとんど使用しない人もいます。2、3日に一度は、近所・知り合いで乗り合わせ町の銭湯へ行っている人、また、バスで行く人もいます。

そんな不便さ、不自由さの中での生活を少しでも潤いのあるものにしたい。そして、仮設住宅の方々の強い要望で実施しました。

午前9時30分、迎いのバスがふれあいセンター前に到着しました。ふれあいセンターで待っていた人たちが、点呼を終えバスに乗り込みます。ボランティアグループ「ひまわり」のメンバーとともに出発の準備が始まります。全員にお菓子とジュースが配られ、日程と諸注意がつけられ、いよいよ出発です。おしゃべりがはじまり、遠足気分となります。

当日、3月15日は、出発時は雨が少し降っていました。南に進むにつれ、雨脚が強くなり、一時は雨のしぶきで前方が見えにくくなり心配しましたが、四国へ着いた頃には小雨となり、1時間30分の行程を終え無事到着することができました。

到着後、思い思いに入浴を楽しみました。入浴道具は一式借りることができ、何度も種類の異なる湯につかって疲れを癒している人もありました。

(葉草湯やダイエット湯・ワイン湯など)

また、昼食は好みの物を食べ、食後はカラオケを楽しみお土産を買って帰る人も多く、予定の時間いっぱいまで過ごしました。

淡路町は、震災でため池がこわれ、水がたまらない状態で生活水が確保できず、3月11日から給水制限に入っていましたので、特に水を十分使えたこと、そして何よりも入浴を済ませたことに満足し、皆さんに喜んでいただけました。

「また、行きたい。もう一度計画してほしい。」との声が多く、日程・曜日など検討しながら計画をたて、定期的の実施していきたいと思っているところです。

事業概要表

	事業名	事業概要	8年度への課題・展望
交流促進事業	交流会・会食会 手芸・ちぎり絵・趣味教室 人形劇・紙芝居会 カラオケの集い・大会 夏まつり・舞踊納涼大会 講話・お月見会 もちつき大会 クリスマス会 一日旅行（健康ランド）	老人会等による（3回） 講師を迎えて（9回：月1回） ボランティアグループによる（4回） "（9回：月1回） "（1回） 講師を迎えて（1回） ボランティアグループによる（2回） "（1回） "（1回）	各事業は、8年度へ継続予定です。 より多くの方に参加していただけるよう計画していきたい。
生活支援事業	健康・栄養相談会 清掃・花植え・苗配布活動	保健婦・いずみ会等による（9回：月1回） ボランティアグループによる（11回）	各事業は、8年度へ継続予定です。 より多くの方に参加していただけるよう計画していきたい。
V コー ディ ネー ト	移送・通院 老人給食配達 引っ越し	要請があれば随時実施（8回） "（37回） "（2回）	
専門 機関 連携 事業	心理・生活相談	郡保健婦・消費者グループによる（2回）	

ふれあいセンター状況

(1996. 4. 1現在)

地区名	仮設数	開所月日	開設日数(週)	開設時間	運営委員の構成	主な事業内容	社協の関わり
鵜崎	115	H. 7. 7. 15	週3回	9:00~17:00	ボランティアグループひまわり 71名の内運営委員 9名	運営協議会の開催 生活・健康相談会 手芸・趣味教室 夏まつり・舞踊納涼大会 交流会会食	事務局として運営に参加

									一日旅行（健康ランド） 清掃・花植え活動 カラオケの集い・大会等	
--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--

ふれあいセンター全体にかかわる成果と課題

<p>【成 果】 ふれあいセンター設置により仮設住宅に住む人々の憩いの場として、また、事業を通じ心身のケアを行い、交流も深まり大きな打撃を和らげ支援に役立ったと思われます。 そして、ボランティア活動の拠点として活用されたと思われます。</p>	<p>【課 題】 寒い時期、特に風の強い冬場は、ふれあいセンターへ訪れる回数が減少します。寒い時期はこもりがちな生活になるようです。 事業の開催日には、数多くの利用者がありますが、普段の開所日は利用される方がかたよりぎみです。地理的・時間的な面が問題のようです。</p>
--	--

(c)1997神戸市社会福祉協議会、兵庫県社会福祉協議会阪神・淡路大震災社会福祉復興本部 (デジタル化：神戸大学附属図書館)

北淡町社会福祉協議会

ふれあいセンターの運営に関わって

北淡町内4ヶ所にふれあいセンターが出来たのは、7年度末の2月になろうとしていた頃で、他の市町よりは遅い完成であった。2月に入り小倉団地ふれあいセンターで節分会の催しを行ったのが、最初のふれあいセンター行事である。

北淡町は毎年この時期強い西風が吹き非常に寒いのだが、2月3日の土曜日は暖かく良いお天気だった。事前にチラシやポスターでお知らせしていたこともあり沢山の方が参加された。この日は数名のボランティアさんと社協の職員で紙芝居の上演や、レクリエーション、豆まきなどを行い、子どもからお年寄りまで楽しんで下さった。参加者の中には「もっと早くこんな施設を作ってくれてたら」、「耳のおいもんどおしここでテレビ見んかよ」（耳の聞こえにくい者同士ここにきてテレビを見ましよう）というふうにいる方もいて少し身がたまされる思いをした。震災から1年がたち、「仮設住宅で不自由な生活を強いられている方々への支援策は？」と問いを巡らせていたが我々にはどうすることもできないことや、そこで生活をしていないが故に気づかないことが沢山あるということに気づいた。

イベントが終わりボランティアさんたちと話す中で、「イベントを行うことによって少しでもそういう方々の気持ちが和めば」というのが我々の想いでありまた、「そうなるように努力する必要があるのでは？」という結論に達した。さらに、コミュニティー・ワークという立場からいえば、イベントだけに限ったわけではないが、そのような日頃の付き合いの中からこそ、地域の方々の悩みや意見というものが、「相談」という形になってあらわれるのだとこのとき感じた。

3月14日は愛媛県の松山市の近くの川内町というところからボランティア研修ということで30名ほどの女性がお越しになられ、小倉Ⅱ団地仮設住宅に住む高齢者夫婦・一人暮らし世帯を中心に「お掃除ボラ」ということで、普段あまり掃除をしないような高いところを中心に掃除をして下さった。

2時間ほどの掃除の後、ふれあいセンターに集まった仮設住宅に住む方や、ボランティアの方はお茶を飲んだりお菓子を食べながら、ふれあい交流を目的としたレクリエーションに参加され、おおいに盛り上がった。その後もいろいろな話をされていたようで、川内町の方々が帰る頃にはすっかり打ち解けて、マイクロバスのところまで見送りに出た人の中には、涙をうかべる人もいて“出会い”の大切さ、尊さを感じた。中には今でも葉書のやりとりを続けていらっしゃる方もいるようで、コーディネートさせてもらったことが有り難いと感じるひとつであった。

お彼岸が過ぎ春めいてくると、育波西部仮設住宅に住む高齢の方々から誰ともなく「花見に行こう」という話が持ち上がった。毎週月曜日に仮設住宅に友愛訪問をして下さっているボランティアグループの方に話すと、二つ返事で協力をして下さるとのことで4月10日の日に決行することになった。町のマイクロバスと車椅子専用のリフト車とに分乗し30数名の団体が三原郡にある桜の名所にむかった

ボランティアさんのアイデアで遠足気分を演出しようと、小袋に小分けした数種類のお菓子を道中それぞれに食べながら1時間半ほどで目的地に到着し、ボランティアさんの上演する紙芝居や歌などに興じたり、お弁当を食べたりと楽しいひとときを過ごした。

桜の花は5分から6分というところで見頃には少し早かったが、仮設住宅での1年余りの生活の中で初めての団体旅行ということで、参加された方も「花見」ももちろんだが普段、生活を共にしている者同士が、一緒に出かけるということに意義を感じているような気がした。

仮設住宅は町の復興の状況から見ても当分は残るであろう。また、仮設住宅には“社会的弱者”とよばれる人たちが今後ますます増えていくであろうことは容易に推察出来る。しかし、一方震災の影の風化とともに地域で生活再建にむけて努力されている方々からの不満の声も聞こえないわけではない。仮設住宅と地域との温度差がいわれる中、この問題に対する対応がこれから社協に迫られる大きな課題のひとつであると思う。



事業概要表

	事業名	事業概要	8年度への課題・展望
交流 促進 事業	ふれあいマッサージ	町内4ふれあいセンターに1回/週のペースでマッサージのボランティアさんが訪れる	8年度継続実施予定
	ふれあい花づくり	仮設住宅・ふれあいセンター周辺でプランター等による花づくりを実施	8年度継続実施予定
	温泉バスツアー	鳴門市にある健康ランドへの日帰りツアー企画	8年度実施予定
	ふれあい花見ツアー	淡路島内の桜の名所への日帰りツアー企画	8年度実施予定
生活 支援 事業	友愛訪問活動	独居老人世帯を中心とした1回/週の訪問活動を実施	8年度継続実施
	ホームヘルパーの派遣	社協の委託事業としてのヘルパーを派遣	8年度継続実施
	仮設住宅の改善	玄関手すりの取り付け、玄関階段の一部修正等の作業	随時実施
	仮設住宅防寒対策事業	主に、独居・高齢等の世帯を対象に防寒対策として畳の下に新聞紙を敷く作業をボランティア活動として実施	
	健康相談事業	町保健婦による血圧測定等健康相談事業を1回/月で実施	8年度継続実施
V コー ディ ネー ト	清掃奉仕活動の実施	仮設住宅住民による周辺清掃のコーディネート	随時実施
	仮設住宅視察ボラン ティアコーディネート	被災地視察兼ボランティア団体等の受入及びコーディネート	随時実施
	ふれあい祭りの実施	屋台等の出店をきっかけに仮設住宅周辺住民との交流会をコーディネート	随時実施
専門 機関 連携 事業	栄養指導	「簡単に作れるおかず」をテーマに保健所栄養士による調理講習会を随時実施	
	小中学生グループワー ク	小中学生を対象にセラピストの方を含むグループが2回/月の割合でグループワークを展開	
	ふれあい交番	元警察官による相談業務	
	生活支援アドバイザー	仮設住宅居住者の生活支援に関する相談業務	

ふれあいセンター状況

(1996. 4. 1現在)

地区名	仮設 数	開所月日	開設日 数 (週)	開設時間	運営委員の構成	主な事業内容	社協の関 わり
小倉団地	110	H8. 1	毎日	9:00~17:00	地区民生委員 地区町内会長 仮設住宅入居代表者 ボランティア	ふれあい交流事業 生きがい創造事業 健康増進に関する事業 相談事業 生活情報を提供する事業	運営に関 する助言 イベント 等への協 力、参加

							ボランティア コーディネーターに 関する協力
背山団地	148	H8. 1	毎日	9:00~17:00	地区民生委員 地区町内会長 仮設住宅入居代表者 老人クラブ代表 ボランティア	ふれあい交流事業 生きがい創造事業 健康増進に関する事業 相談事業 生活情報を提供する事業	運営に関する助言 イベント 等への協力、参加 ボランティア コーディネーターに 関する協力
育波西部 団地	84	H8. 1	毎日	9:00~ 17:00	地区民生委員 地区町内会長 仮設住宅入居代表者 老人クラブ代表 ボランティア	ふれあい交流事業 生きがい創造事業 健康増進に関する事業 相談事業 生活情報を提供する事業	運営に関する助言 イベント 等への協力、参加 ボランティア コーディネーターに 関する協力
室津埋立 団地	56	H8. 1	毎日	9:00~ 17:00	地区民生委員 地区町内会長 仮設住宅入居代表者 老人クラブ代表 ボランティア	ふれあい交流事業 生きがい創造事業 健康増進に関する事業 相談事業 生活情報を提供する事業	運営に関する助言 イベント 等への協力、参加 ボランティア コーディネーターに 関する協力

ふれあいセンター全体にかかわる成果と課題

<p>【成果】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・仮設住宅居住者と地域住民との交流が以前より活発になった ・ふれあいマッサージや清掃奉仕活動を通じ仮設住宅居住者同士の連帯感や積極性が高まった 	<p>【課題】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ふれあいセンターの運営に積極的な役員の立場の人の仮設住宅退去後の後任者選びやその後の対応をどうするのか ・仮設退去者が増え独居老人世帯、高齢者世帯の割合が増加してくる中、高齢者の自立をいかにサポートすべきか
--	---

（津）一宮町社会福祉協議会

仮設住宅入居者に安全と安心を みんながスクラム...

【はじめに】

平成7年1月17日未明に発生した阪神淡路大震災によって、震源地に近い一宮町も大きな被害を受け、死者10名、重傷者16名の人的被害をはじめ、全・半壊家屋約1,500戸は実に全世帯数の半数近くを占めた。

仮設住宅は17団地に376戸が建設され、4月上旬に全員の入居を完了した。

【取り組みの経過】

1. 避難所から仮設住宅へ

一宮町では、震災発生後最大時6ヶ所の避難所に約900名の住民が避難していたが、住居の片づけのめどがたってくると、徐々に減少していった。その中で避難所に残ってきたのは、独居老人や老人夫婦の高齢者がほとんどであった。

3月中旬の第1次入居に伴い、看護婦や保健婦による要援護家庭への訪問活動、ボランティアによるニーズ調査などから情報が集まり、その際、住宅内外のあちこちにある大きな段差や狭い浴室などが問題として浮かび上がってきた。しかし、仮設住宅の設備自体に関する問題点はどうすることもできず、この設備の中でA D Lを維持していくことが必要だと考えた。

2. 仮設住宅改善の要望

4月上旬、県の依頼があつて民生委員がスロープや手すりの希望を聞き取りで調査し、また、6月下旬には県の震災対策室より指示があり役場職員が全戸訪問を行い、設備の使い勝手を設備ごとにチェックし、改善希望の有無を認識した。

3. ボランティアの申し入れとその調整

阪神間で仮設住宅の改善を行い、改善に関するノウハウを身につけていた建築系のボランティア団体が、一宮町にも休日を利用して改善を行いたいという申し入れがあり、とりあえず、1次入居のうち1日の活動で対応可能な18戸の団地に入ってもらふことにした。この話に前後して、仮設住宅改善の研修に参加していた保健所の保健婦から、別団体からボランティアの申し入れがあること、費用の一部を助成できる組織があることなどを紹介された。

当初は、ボランティアの対応が可能な範囲で改善を行うよう考えていたが、この2団体で希望のほぼ全数に対応可能であること、家屋改善は一般住宅にも必要になってくることなどから、ボランティアの活動で対応しきれないものへの対応と、今後新たに要望がでた時に対応できる体制づくりを目標において事業に取り組むことにした。同時に当初難色を示したいた対策本部と協議し、仮設住宅の改善の許可をとりつけた。

4. 改善の実際

ボランティア団体による改善は6月末から7月の3日間で実施された。当日は2団体共、大学の建築学科の教授をリーダーに建築士・大工・理学療法士・作業療法士・福祉器具業者等の参加が得られ、それぞれ工具や資材の一部を持って現地入りし、人的・経費的に大きなメリットをもたらした。

改善を実施したのは79世帯、内容は玄関周りの手摺やブロック設置、浴室周りの踏み台や手摺の設置が主なものである。

【まとめ】

仮設住宅の改善はほぼ要望通り実施された。現在は一般住宅の改善（浴槽内の手すりの取り付けなど）にも取り組み始めている。今回の活動の成果として、次の点があげられる。

1. 仮設住宅の設備上の問題によるA D Lの低下防止に一定の効果があつた。
2. 社協と行政機関（保健所・役場福祉担当課）との連携が密になった。
3. これまで必要性を感じながらも手を出せなかつた家屋改善に取り組むきっかけづくりとなった。
4. 家屋改善の必要箇所を具体的に示すことができるようになり、町保健婦を通じP TやO Tなどの関係職種にうまくつなげるようになった。



事業概要表

	事業名	事業概要	8年度への課題・展望
交流促進事業	ふれあいセンターの運営	7年6月にふれあいセンターが開設され、自治組織と連携して事業を運営している。 事業内容：趣味教室、ミニ喫茶、健康のつどい等の開催	8年度へ継続
	ふれあい交流事業	バスツアーの開催 1. 明石海峡大橋方面...参加者50名 2. 鳴門市観光...参加者45名	8年度へ継続
生活支援事業	住宅改善事業	ボランティアの協力を得て段差解消、手摺の取り付け等実施 平成7年度仮設改善世帯数...95世帯	8年度へ継続
	移送サービス事業	移送手段確保の困難な高齢者、障害者の通院時に介助付きサービスを提供している。	8年度へ継続
	健康相談・栄養相談	保健婦・栄養士の協力によりふれあいセンター内において健康チェック料理指導等を毎日1回開催	8年度へ継続
V コーディネート	ボランティア交流事業	友愛訪問...高校生等による友愛訪問活動 5回 50名 炊き出し...他町ボランティアによる炊き出し 2回 400食 音楽・芸能慰問...ロックバンド、大正琴、民謡、芝居による慰問 7回100名 清掃奉仕...室内及び周辺の清掃奉仕活動 6回 250名	8年度へ継続
専門機関連携事業	無料法律相談	ボランティア弁護士による相談事業 1回 20名	

ふれあいセンター状況

(1996. 4. 1現在)

地区名	仮設数	開所月日	開設日数(週)	開設時間	運営委員の構成	主な事業内容	社協の関わり
一宮町郡家	86戸	H8. 6. 16	7日	9:00~21:00	仮設入居者代表11名	1. 運営協議会の開催 2. 健康教室	事業活動支援

